HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	私見「新人文主義」：文学研究科発足10年によせて
著者	濱，忠雄
引用	年報新人文学，5：2-6
発行日	2008-12-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

［巻頭言］

私見「新人文主義」

――文学研究科発足一〇年によせて

濱　忠雄

文学研究科が発足したのは日本文化専攻修士課程が開設された一九九九年四月のことです。ですから、今年でちょうど一〇年になるわけです。この節目の年にあたって、文学研究科の理念であり本年報の誌名にもなっている「新しい人文学」あるいは「新人文主義」について復習しておくことも無意味ではないでしょう。

「新人文主義」とはなにか。その定義は、前研究科長の大濱徹也氏が本年報創刊号（二〇〇五年）の巻頭言で書かれた一文に明快に示されています。――「人間解放の名の下に、人間が自然を征服し、人間至上が『近代』の価値であると思いみなし、人間が欲望のおもむくままに世界を支配することに道を開いた人文主義が堕ちこんだ隘路を凝視し、人間が人間であるとは何かを問い質そうとするものである。」

私が北海学園大学に着任したのは英米文化専攻修士課程が設置された二〇〇三年ですが、「新人文主

義」には大いに共鳴したものです。というのは、私の研究テーマは旧フランス領植民地サン＝ドマング（現在のハイチ）で起こった先駆的な黒人奴隷解放と中南米における最初の独立に帰結した「ハイチ革命」ですが、「新人文主義」という立場は、カリブというローカルな場から出発して、フランス革命や「人権宣言」の意味を吟味し、あるいはグローバリゼーションやポストコロニアルというグローバルな連関のなかでより等身大に近い近代世界史を構築しようとする課題につながるからです。以下では、もう少し敷衍して、「新人文主義」についての私見を述べます。

大濱氏が指摘した「人文主義が堕ちこんだ隘路」に関わって、私はアンソニー・パグデンの『ヨーロッパと新世界の出会い』（Anthony Pagden, *European Encounters with the New World: From Renaissance to Romanticism*, Yale University Press, New Haven & London, 1993）を想起しました。この本は大航海時代を発端とする対外膨張の過程で形成されたヨーロッパ人の自己理解と他者認識のあり様を追跡したものですが、そのなかに次のような叙述があります。「自然は、神が人間に、そして人間が利用するために授けたものなのだから、自然を変えることが人間が人間であることの決定的な要素であるという信念を持っている点で、ヨーロッパの人間は特異な存在である」。「ヨーロッパの人間に限らず、人は誰でも、自己と他者を区別するものである。だが、古代ユダヤ教的な、従ってまたキリスト教的な見方に特徴的なのは、差異というものに直感的に反応するだけでなく、世界がどのように組み立てられているかを構造的に捉えようとする点にある。」

このようなヨーロッパ人の自然観や世界観、あるいは自己理解と他者認識、とくに「差異というものに直感的に反応するだけでなく、世界がどのように組み立てられているかを構造的に捉えようとする」

態度は、「オリエンタリズム」と言い換えることが可能でしょう。「オリエンタリズム」とは、簡潔に言えば、世界を「ヨーロッパ」と「非ヨーロッパ」とに分けて、「ヨーロッパ」を優れた（進んだ、文明の）世界と捉え、「非ヨーロッパ」を「ヨーロッパ」よりも劣った（遅れた、野蛮な、非文明の）世界と見る思考や、「文明には非文明を文明化する使命がある」とする行動様式に当てられる用語です。

もともとオリエントは、その語源であるラテン語の「オリエンス」が「陽が昇る方角」という意味であることからも分かるように、憧憬の対象でした。それは、「創世記」に書かれている「東方のエデンの園」や、「マタイ福音書」でイエスを神の子として最初に発見するのが「東方からやって来た博士たち」とされていることとも重なります。オリエントを憧憬の対象とする観念は中世の世界図であるＴＯ図にも表れます。そこでは、東方＝アジアは地図の上半分に描かれるのです。

ところが、このようなオリエントに対するイメージは、一五、一六世紀を境に変化します。大航海時代の展開と、これと前後して起こったルネサンスの精神運動のなかでヨーロッパ人に芽生えたのは、自分たちこそがギリシアやローマの古代文明の唯一かつ正統な後継者であるという自意識であり、そのような自負が、ヨーロッパの外の地域を価値あるものとしてではなく、自分たちよりも遅れた野蛮な非文明の社会と位置づける思考の形成を促したのであり、こうして、それまで憧憬の対象であったオリエントは一転して蔑みの対象となったのです。

重要なことは、「ヨーロッパ」対「非ヨーロッパ」という二項対立のなかで形成されたいわば外向きの「オリエンタリズム」が、ヨーロッパ内にも投影されて、「文明」対「自然」、「正統」対「異端」などの二項対立のなかで差異化し序列化する思考、いわば内向きの「オリエンタリズム」と表裏をなしたこと

です。私は、「人文主義」がはまり込んだ陥穽を看破した最初の人は誰なのでしょうか。その点では、中川久定氏の『啓蒙の世紀の光のもとで　ディドロと「百科全書」』（岩波書店、一九九四年）が参照されるべきでしょう。彼は「一八世紀ヨーロッパが、自らの価値を中心として確立した時、この中心とは実際には、ヨーロッパ人であり、男性であり、主人であり、嫡出児であり、大人であり、理性であり、健常者であり、覚醒であった。こうした観念に対して疑念を提出したのは、おそらく、ただひとりディドロだけであった」と書き、代表的な作品として、人間の知が禽獣の知に勝ると一方的に断定することに疑問を提示するだけでなく、人間的知と動物的知との価値の転倒、後者の復権の可能性を示唆した『盲人書簡』（一七四九年）、理性はいつも自らが主人であり中心であるとして非理性を無価値で恥ずべきものと断罪しているが、果たしてこの思い込みは正しいかと問うた『ラモーの甥』（一七六一―一七六二年）を挙げています。

私の土俵に引きつけるならば、ギヨーム・トマ・フランソワ・レナールの大著『東西両インドにおけるヨーロッパ人の建設と通商に関する哲学的・政治的歴史』（初版一七七〇年、略称『両インド史』）も挙げることができます。この本は、大航海時代以降のヨーロッパの対外膨張＝植民地主義的展開の過程を網羅的に叙述していることから、「第二（または植民地）の百科全書」とされるものですが、協力執筆者となったディドロは、そのなかに反植民地主義の言説を書き込んだのです。それは、当時にあっては先例のないラディカルなものでした。そのために、パリ高等法院は『両インド史』を出版停止、レナールに身柄拘束の処分を下したのでした。「啓蒙思想の異端児」と評されるディドロはさしずめ「新人文

主義」の先駆者と言ってよいでしょう。

このように書くと、「人文主義」を全否定しているかのように読めるかもしれません。しかし、それは私の本意ではありません。神や教会を中心とする中世的な世界観から人間を解放して、現実生活の全面的肯定と人間個性の自由な発揮を目指した「人文主義」の意義を全否定するとしたら、それは「たらいの水と一緒に赤子を流す」にも等しいでしょう。「新人文主義」は「人文主義」を批判的に継承するものだからです。

（はま　ただお・北海学園大学大学院教授）